

## 新葉和歌集と本歌取り

## はじめに

南朝北朝大動乱の最中、南朝方で撰ばれた準勅撰集『新葉和歌集』に関して、書誌、歌風等についてはさまざまに説かれているが、修辭的技巧（ことに本歌取り）の面においては、まだ十分考察が進められていないようである。『新葉集』の歌の特質は、久松潜一博士が、「歌としての特異な表現というよりは、その題材や精神において吉野時代の悲壮な情緒がうたわれた所にある」（『和歌史』第三卷）と説かれているとおりであるが、その「吉野朝の君臣一体の悲壮なる精神」（同）がどのように表現されているかを、本歌取りの調査を通して明らかにしてゆきたいと思う。

## 1

『新葉集』の歌数は流布本によれば、一四二〇首であり、このうち本歌取りの歌は二四九首にのぼり、総歌数に対する百分比を求め

西畑実

てみると、一七・六パーセントになる。

いま、試みに鎌倉時代以後に成立した勅撰集における本歌取りの比率を誌してみると、次のようになる。（ただし、漢詩を踏んだものや本説取りはこの統計のなかに入れていない。）

歌集名	本歌取りの歌	百分比
新古今集	二七〇首	一三・六%
新勅撰集	二四〇首	一七・七%
続後撰集	一四八首	一〇・八%
続古今集	二六一首	一三・五%
続拾遺集	一八〇首	一二・三%
新後撰集	一六六首	一〇・三%
玉葉集	七八首	二・七八%
続千載集	一六六首	七・七三%

（注）

ち本歌取りの歌は二四九首にのぼり、総歌数に対する百分比を求め

新葉集	二四九首	一七・六%
新統古今集	二八〇首	一三・一%
新後拾遺集	一六四首	一〇・六%
新拾遺集	一七八首	九・二七%
新千載集	二三五首	九・九四%
風雅集	九〇首	四・〇二%
続後拾遺集	一二四首	九・一五%

ということになり、『新勅撰集』とはほぼ同率になるのみか、南北朝時代の二条派の手になるどの勅撰集よりもはるかに数値が上回るのである。二条派の歌風の嚆矢となった『新勅撰集』の特色に、多大の時を隔てて回帰したのが『新葉集』であり、その意味でも、同集は特異な集と呼ばれてもしかるべきであり、「ある程度生理的激情に即した自由さを持っている歌集であり、多少とも因襲にこだわらない、はつらつとした生氣を含んでいる」(増補新版『日本文学史』3) ことと通じあう点がある。

3

『新葉集』が本歌にしているのは、  
万葉集一〇首 古今集一二四首 後撰集一六首 拾遺集九首

続千載集 一六六首 七・七三%

後拾遺集三首 金葉集一首 詞花集一首 千載集三首 新古今集二〇首 新勅撰集六首 伊勢物語一首 大和物語一首 源氏物語七首 狭衣物語一首 夫木抄一首

である。  
これによると、『古今集』の歌がもっとも多く本歌に取られているが、これは、勅撰集の伝統によるものであり、ありふれた現象だとしても、これを内訳にしてみると、

- 春上一八 春下一八 夏一八 秋上一四 秋下一四 (計三二首)
- 賀一二 離別一二 羈旅一五 物名一四 (計一三首)
- 恋一一〇 恋二一四 恋三一九 恋四一八 恋五一九 (計四〇首)
- 哀傷一三 雑上一二〇 雑下一一〇 雑躰一七 大歌所御歌一八 (計三八首)

四季の部と恋の部を除いて、他の部立の歌を合計すると、五一首となり、比較的雑歌を本歌に取る場合が多いようであり、これが『新葉集』の歌の本質ともっとも深く関連している観がある。

4

それでは、誰の歌が頻繁に本歌に取られているかといえは、六三名にのぼる作者のうち、

読人しらず七三首 (四回本歌となるもの一首、三回本歌となる

もの四首、二回本歌となるもの二一首)

在原業平一五首(三回本歌となるもの二一首)

壬生忠岑七首(二回本歌となるもの二一首)

伊勢六首

素性法師五首(二回本歌となるもの三一首)

小野小町四首(二回本歌となるもの一首)

紀貫之三首

平定文三首

紀友則三首

柿本人麿三首

清原深養父二首(三回本歌となるもの一首)

天智天皇二首(二回本歌となるもの二一首)

藤原敏行二首

凡河内躬恒二首

藤原顯輔二首

(以下省略)

『詞花集』の撰者顯輔の歌を本歌とするものもあるが、それはさておいて、『新葉集』においても、在原業平の歌がもつとも好まれており、それについて、『古今集』の撰者時代の歌が愛好されている。その点、『新葉集』も、代々の勅撰集と軌を一にしているといえるが、問題はこれらの作者の歌を如何に利用しているかに存するであろう。

## 5

『新葉集』には、恋の歌に本歌取りの作が多い。二条京極両派の対立期以降に編まれた勅撰集に含まれる恋の歌の百分比を求めると、次のとおりである。

歌集名	本歌取りの恋歌	本歌取りの歌の総歌数	百分比
玉葉集	二二首	七八首	一五・二%
続千載集	五五首	一六六首	三三・一%
続後拾遺集	四七首	一二四首	三七・八%
風雅集	一八首	八九首	二〇・二%
新千載集	七七首	二三五首	三二・八%
新拾遺集	六〇首	一七八首	三三・七%
新後拾遺集	四三首	一六四首	二六・八%
新統古今集	八八首	二八〇首	三一・四%
新葉集	八五首	二四九首	三四・一%

この調査表でみると、『続後拾遺集』の比率が一番高く、『新葉集』がこれにつぐが、『新拾遺集』を除けば、『続千載集』が『新葉集』にもっとも近い。『和歌文学大辞典』がいつているように、『新葉集』は『続後拾遺集』をつぐものであり、かつ部立は『続千

載集』にもっとも似ているところから、これらの勅撰集の体制を宗良親王が意識して踏襲したものであろう。このことは、『新葉集』が「固定的和歌的視野の範囲内で平淡な詠じ方をした二条家風である」(『和歌文学大辞典』)との評を蒙る一因ともなっている。

## 6

ここで、視点を転じて、どのような歌が多く本歌に取られているかを見てゆくことにしよう。(括弧内の数字は本歌取りの回数である。)

- (四) 尋ねてもわれこそ訪はめ道もなくふかき逢のもとをの心を  
 『源氏物語』 蓬生
- (三) 人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざ  
 かへりなむ『古今集』 源実
- (三) 名にしおはばいざこととはむ宮こどりわが思ふ人はあり  
 やなしやと『古今集』 在原業平
- (三) 人しれぬ思ひやなぞとあし垣のまぢかけれどもあふよし  
 のなき『古今集』 読人しらす
- (三) すまのあまの塩やき衣をさをあらみまどほにあれや君が  
 きまささぬ『古今集』 読人しらす
- (三) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの  
 身にして『古今集』 在原業平
- (三) 世の中はなにかつねなるあすか河昨日のふちぞけふはせ

『新葉集』は「統後拾遺集」をつくものであり、かつ部立は「統千

になる『古今集』 読人しらす)

(三) ひかりなき谷には春もよそなればさきてとく散る物思ひ  
 もなし『古今集』 清原深養父)

(三) もがみ河のぼればくだるいな船のいなにはあらずこの月  
 ばかり『古今集』 東歌)

(二) 木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり  
 『古今集』 読人しらす)

(二) 今こんといひしばかりに長月のありあけの月をまちいで  
 つるかな『古今集』 素性法師)

(二) わが庵は三輪の山本こひしくはとぶらひ来ませ杉立てる  
 門『古今集』 読人しらす)

(二) 君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ  
 『古今集』 東歌)

(二) 忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふ  
 まで『拾遺集』 橘忠幹)

ところが、『新古今集』でもっとも頻繁に本歌に取られている、  
 五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする『古今

集』 読人しらす)

が一回のみ、  
 さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫『古今

集』 読人しらす)

は一回も本歌に取られず、かつ、『新勅撰集』やその他の勅撰集で  
 もっとも親炙されている、



ありあけのつれなくみえし別れよりあかつきばかりうき物はなし  
 し『古今集』 壬生忠岑)

もまったく利用せられていない。

これを通観すると、もとより『新葉集』独自の本歌取りの手法も認められるけれども、比較的新古今的な方向に傾いており、新勅撰撰のな智巧な手法も見られなくはないにしても、新葉歌人は感傷的な要素の強い本歌を好んで取り上げる傾向にあるといえる。

『新葉集』が雑の歌を多く本歌に取っていることも、「離別・羈旅・哀傷・雑には悲壮な歴史がまざまざと書き現され」(西下経一『和歌史論』)ていることの裏付けになるかと思われる。換言すれば、『新葉集』の本歌の取り方は、二条派の規範たる『新勅撰集』的な取り方ではなく、かえって、『新古今集』のそれに近いということができ、単に平淡美を追求しているのではないといえよう。

## 7

いとど猶もとしし人や訪はざらん木の葉ふりしく蓬生の宿(前大納言光任女)

人ははや通ひ絶えにし蓬生のもとの心に松虫の鳴く(右兵衛督成直)

尋ねても訪はれし事は昔にて露のみ深き蓬生の宿(関白左大臣)

蓬生のもとし道は変らぬにいかにかれゆく契りなるらん(前

## 大納言実為)

この四首は、『源氏物語』蓬生の巻の「尋ねてもわれこそ訪はめ道もなくふかき蓬のもとの心を」からの本歌取りであるが、本歌の詞を裁ち入れて情緒を複雑化せしめ、物語的な浪漫性を湛えるのに成功している。こうなると、もはや平板な二条家風とはいいがたいものであって、新古今風を思わせるものである。『新葉集』の恋の歌がすべてこのようであるというのではなく、平淡美の歌が中樞を占めている観があるけれども、かかる物語的性格の歌が詠まれ得たのは、結局、本歌の取り方如何によるものであって、量的にはなはだ少ないが、新古今的な取り方が回復されているというべきであろう。

当時、冷泉派に近い歌風を打ちたてていたといわれる花山院長親の次のような本歌取りの作品にも、

春来ても川風さむしみかの原たつやかすみの衣かせ山  
 ほのかなる闇のうつつの一声は夢にまさらぬ時鳥かな  
 待ち出づる月は夜寒の有明に言ひばかりと打つ衣かな  
 それが窺われる。

## 8

『和歌史論』の著者は、「新葉集には風雅の常道を地盤として悲壮がよまれてゐる」と説いているが、「風雅の常道を地盤」とすることを本歌取りと考えるならば、その手法によって、いかなる悲壮

蓬生のもとこし道は変らぬにいかにかれゆく契りなるらん(前)

感があらわれるに至るのであるうか。有名な、

をさまらぬ世の人ごとのしげければ桜かざしてくらす日もなし

(長慶天皇)

これは、「もしもしきの大官人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ」(『新古今集』 山部赤人)に拠っているのである。本歌が「時間的な回顧的な詠嘆のなかに新古今的な浪漫性」(安田章生博士『新古今秀歌』)を漂わせているのに対し、長慶天皇は、本歌の第四・五句を逆にとることによって、平穩無事な日々を送ることの不可能な動乱時代の天子の感懐を打ち出しているのである。もとより、題詠ではあるが、題詠という枠をつきぬけた、「生活体験にうちつけられた素直な抒情が見られる」(『和歌文学大辞典』)のである。同じ帝王の身で、同じ本歌に発想を求めて、伏見院の詠じた、さくら花はやさかりなりもしもしきの大官人はいまかざすらし(『統千載集』)

とは、異った詠み方をしているところにも、それは、窺えよう。

霞めただ春や昔の形見とて見れば涙の古里の月(権中納言經高)

この歌が「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」を本歌にしていることはいうまでもあるまいが、かの『伊勢物語』の妖艶を極めた舞台は消えさって、跡に残るのは、ただ古里(京都)を偲ぶ涙である。これと『新古今集』の俊成卿女の歌、面影のかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に

と比較してみるに、ともに題詠であるが、後者は、「本歌が一首の

ことを本歌取りと考えるならば、その手法によって、いかなる悲壮

気分醸成に参与して複雑な物語的情趣を形成している」(『和歌文学大辞典』)、「妖艶の美のたちこめる中に、物語的浪漫性がある」(『新古今秀歌』)のに対し、後者は、気分醸成に参与するよりもむしろ、懐旧の気分が逆に本歌を利用しているように思われる。したがって、単なる机上の作ではなく、作者の実情実感、京都を遠く離れた地に暮らしているだけに、「切実なる真実感」(『和歌史論』)を含んでいるといえる。このとき、本歌取りは一首に悲壯感を盛るべき媒材となつていたのである。こういう手法は『新葉集』独自のものであつて、数こそ少なけれ、特色ある作品が生み出されるに至っている。

我宿とたのまずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ(長慶天皇)

さらば身のうき瀬も変る飛鳥川涙加はる五月雨の頃(尊良親王)

伊勢の海に沈まば沈め身のはてよつりのうけなるさまもうらめし(宗良親王)

これらは、「二条派よりも寧ろ京極派の人々が詠みさうに思われる」(大野木克豊 岩波講座日本文学『新葉和歌集』)歌であるが、本歌取りの作品であつて、元弘の変以後の感懐が雄勁な調べのうち沈潜している。

思ひきや手も触れざりし梓弓起き伏し我身慣れむものとは(宗良親王)

これは、『新葉集』の詞書によれば、「あづまの方に久しく侍りてひたすらもののふの道にのみたづさはりつつ征東將軍の宣旨なども思ひの外なるやうにおぼえて」よんだ歌であるから、もとより題詠ではなく、典型的な機会詩である。だが、その場合でさへ、この歌は、証歌のある語句が用いられているのである。『古今集』の紀貫之の「手もふれで月日経にけるしらま弓おきふし夜はいこそ寝られね」が本歌になっている。後者は、恋の歌であり、手馴れた技巧的な歌であるが、前者は、本歌の詞を裁ち入れながら、雄々しく悲壮な調への歌となっている。それはともかく、重要な点は、かような機会詩に本歌を利用することが、宗良親王の、引いては、新葉歌人の本歌取りの特色ではないかと思われることである。新葉歌人が「古歌に緋り、本歌取を事とする」ことは、すでに大野木氏が前掲の書で述べておられるが、新葉歌人は題詠のみならず、機会詩までも本歌取りの手法を拡大したのだといえよう。

右近大將長親いとけなき子におくれて侍りし頃しをれたる  
撫子につけてつかはし侍りし  
宗良親王

よそへつつ思ひやるこそ悲しけれかくやしをれし撫子の花

撫子につけて歌を送るので、『後撰集』の読人しらすの「我宿の垣根にうゑしなでしこは花に咲かなむよそへつつ見む」が、おのずから念頭に浮かんで、この歌から一首の想がなったものであろう。想はやや平凡であるが、哀愁味の勝った作品になっている。大野木

氏の説かれるごとく、「表現を巧にすること」は二条派の流れを汲む南朝の人々のよくするところであるが、機会詩に本歌が用いられるとすると、本歌取りは、その本来の機能——情緒を複雑にすること、超現実的な世界を構成すること——を喪失して単なる表現美を荷う手法に墮して行かざるを得ぬ。

をばすて山ちかく住み侍りし比夜ふくるまで月を見て思ひ  
つづけ侍りし  
宗良親王

これにます都のつとは無きものをいざといはばや姑棄の月  
本歌が『古今集』の東歌の「をぐるさきみつのこじまの人ならば宮このつとにいざといはましを」であることはいうまでもない。姑棄山の月をみながら、これを都の苞にしたいというのは、その地に住みついている者でなければ容易に表出しがたいものであろう。著想がおもしろく、好個の機会詩になっているうえ、本歌の詞も巧みに幹旋されている。

前大納言為定身まかり侍りし頃かの遺跡によみてつかはし  
侍りし哀傷五十首歌中に  
宗良親王

さばかりにつらき渡りを三瀬河かはと見ながらなど帰り来ぬ

思ふ人無しとは聞きつ都鳥今は何てふ事か問ふべき

本歌は略すが、表現が巧みなわりには迫って来るところが少なく、古歌に緋っている程度のものである。これも機会詩に本歌が利用されているところに、宗良親王の本歌取りの特質を見ることができ

こしの国に侍りし頃鞆中百首歌よみて都なる人のもとへつ

かはし侍りし中に初冬を

宗良親王

部にも時雨やすらむこしちには雪こそ冬の始めなりけれ

羈中百首とあるから、まず題詠であろうが、『後撰集』の読人しらずの「神無月降りみふらずみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける」を踏まえながら、越の国に住んでいるところから、時雨を雪に置き換えたのである。そこには作者の実情が色濃く投影されている。こうした本歌取りの手法は、『新古今集』にはごく僅かしか見られないものであった。かように宗良親王は、古歌を自己の実感に引きつけて取るというところに、その資質を発揮しているのである。

かざせども老はかくさで梅の花いとどかしらの雪と見えつつ

宗良親王

かへずとも人な咎めそ翁さび今年ばかりの花染の袖 同

これらは天授千首の歌であり、宗良親王晩年の作であるが、自己の現実体験を本歌に縫って形象化するという態度は、若年より老齡に至るまで一貫しているといえる。

10

宗良親王のかような本歌取りの手法は、突如して出現したのではない。先蹤があるのであって、それは西行法師である。西行の本歌取りについては、『大阪樟蔭女子大学論集』第五号（昭和四十二年刊）に述べておいた。『山家集』（日本古典全書本）によれば、西行

の本歌取りの作品は、約五十首見出され、総歌数二千八十八首に對する比率を求めると、約二・四％という数値が得られる。この数値は、宗良親王のおもてむきの『新葉集』入集歌九十九首中、約三十首（比率三・〇％）までが本歌取りであるのに比して、はなはだしい径庭が認められるが、これらの歌を題詠（機會詩）とに分けて考察することにする。

宗良親王

題詠 三九・一二四・一二七・一四四・二四七・三一七・四〇九

・四七八・五二〇・五二四・五六〇・七二〇・七八九・八

五四・九七四・一〇五六・一〇七三・一一四八・一二六九

（計一九首）

非題詠

三二九・三三一・五一三・五二六・一二〇〇・一二三一・

一三二〇・一三三一・一三二四・一三八二・一三八六（計

十一首）

ちなみに、『新葉集』では読人しらずとしながら『李花集』に見えている作品の番号をも示しておく、題詠・非題詠の区別は『李花集』の詞書によった。

題詠 四五五・六四三・六四七・六九八・七二七・七六七・七六

九・七七三・八六九・九一三・九三九・九六〇（計十二

首）

非題詠

一八二・二七三・四八三・七三一・七六八・七七二・一二

一九・一二二二（計八首）

西行法師



## 題詠

二〇九・二一四・三〇六・三一五・六一八・六三一・六三二・六六六・六七九・七一四・七三九・七六四・七七七・七八一・九九二・一三〇六・一三三三・一三三八・一三九〇・一三八六・一四二七・一五九二・一五九三・一六九〇・一七〇七・一九四八・二〇一三・二〇二七・二〇九八・二二二七・二二五七（計三十一首）

## 非題詠

一一四・三七五・四四八・四五〇・五八二・八一六・八一七・八四三・八九〇・九九六・一一三三（重出）一九二五）・一一三四・一六七・一八三・二〇一・二二一四・二二五・一三〇八・二二一四（計一九）

これによると、宗良親王の本歌取りは、題詠と非題詠との間にさほどいちじるしい懸隔が存しないことは西行法師と同様である。西行法師の題詠には生活体験に即した独自の歌が少なくないが、宗良親王の場合も、大野木氏の説かれるごとく、「元弘以来の事変に遭遇して或は戦場に馳駆したる如き」悲痛な体験が色濃く影を落としてゐる。非題詠の場合にはなおさらのことである。

## 11

それでは、西行法師の非題詠における本歌取りはいかなるものであるかというに、

「雨のふりけるに、花のしたにて車たててながめける人に」という詞書のもとに、

ぬるともとかげをたのみておもひけむ人のあとふむけふにもあるかな

という歌がある。これは『拾遺集』の読人しらすの歌「桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の蔭にかくれむ」に拠るものであるが、西行の歌と制作事情とが深くかわりあっていることが注目される。つまり、西行は、その場の雰囲気になさわしい歌を引いて挨拶としたのであって、本歌を取ることによって、別の詩的世界を創造しようと思企したのではなく、発想の地盤は、あくまでも実情主義的なのである。さらに、興味を引くのは、西行の非題詠における本歌取りの作品の大半は羈旅の歌であることである。

粉河・吹上遊覧（八一六・八一七）―能因法師〔金葉集〕―五六六五）

大峰入（九九九・二二〇一）―僧正行尊〔金葉集〕―五六八・五五六）

初度陸奥の旅（二二四・二二五）―能因法師〔後拾遺集〕―五一八） 橘季通〔後拾遺集〕―一〇四二）

天王寺参詣（一一八三）―在原業平〔古今集〕―四一八） 住吉社参詣（一三〇八）―源経信〔後拾遺集〕―一〇六四）

春日社参詣（四四八）―安部仲麻呂〔古今集〕―四〇六） 良暹旧居参観（一一三三、重出・一九二五）―良暹法師〔詞花集〕―一三六六）

閑院殿参観（一一三四）―赤染衛門〔後拾遺集〕―一〇五九） 伊勢閑居（二二一四）―喜撰法師〔古今集〕―九八三）



このように、名所・旧跡における詠歌は、西行にあっては、先行作品が発想の契機となっている場合が多いのである。

## 12

もとより、宗良親王は、西行と時代も境遇もまったく違うが、ただ、親王が特殊な環境に置かれていたことは確かだ、西行と重なり合う点もあり、自然、その感懐においても特殊なものとなるのは当然のことである。その意味で、宗良親王の本歌の取り方を西行型と称しても差支なからうと思う。西行よりもはるかに事情が深刻ではあるけれども、東国と南山との間を往還したという点で、宗良親王も旅の詩人であった。羈旅百首のごとき作をもっているのも、このことを裏付けよう。

信濃国にても又年月をおくり侍りに行宮の御しきもおぼ  
つがなく思ひ給ひしかばあからさまによし野にまゐりてや  
がて下り侍らむとせし時内裡にて人々百番歌合し侍りに  
旅の心を 宗良親王

老の浪又たちわかれいな舟ののほればくだる旅の苦しさ

この歌は題詠であるが、長い詞書を読むとき、この歌はおのづから非題詠的な様相を帯びる。機会詩とさえいってもよからう。

本歌は『古今集』の東歌の「もがみ川のほればくだるいなふねのいなにはあらずこの月ばかり」であるけれども、実情が吐露されていて、およそ他の本歌取りとは趣を異にしている。このように宗良

親王の本歌取りは、痛切なる実感に依拠している点において独自のものがある。先に西行型とした所以である。『新葉集』の本歌取りの手法がすべてかくのごときものであるとはいえないが、少くとも興味を惹くのは、古歌に縋りながら、その底にふかぶかと実感を滲えたものである。ここに、新古今の本歌取り、新勅撰の本歌取り、玉葉風雅の本歌取りと並んで、新葉の本歌取りも、また、一つの位置を占めると思うのである。

## 13

先にも述べたとおり、『新葉集』は本歌取りに富んでいる。これは、宗良親王および南朝の歌人が二条派の流れを汲んでいることにも原因はあろうが、宗良親王自身が極めて本歌取りに熟達していたためである。親王の家集『李花集』には、親王自身の作八九九首が収められており、——題詠四七六、非題詠四二三となるが——その内約二百首ほどが本歌取りの歌で、総歌数との比率を求めると、約二十二％になるのである。

本歌取りのもっとも盛んであった新古今歌人たちの比率についていえば、俊成卿女三十三％、藤原家隆二十四％、後鳥羽院二〇％、藤原定家二〇％以上（石田吉貞博士『藤原定家の研究』参照）、藤原良経十五％、宮内卿九・二％、藤原秀能八・四％、源通光七・三％のごとくであるから、宗良親王の比率はかなり高いといえるであろう。

この宗良親王の撰になる『新葉集』に本歌取りが多いのは当然だともいえる。その取り方もさまざまであるが、古歌に縫って実感を述べるという手法が主流を占めていることは、まづ動かないところであろう。『新葉集』における本歌取りと『李花集』のそれを比較

することも興味ある問題であるが、このたびは、『新葉集』における本歌取りの実態を報告するだけで筆を擱くことにする。  
(注) 小島吉雄博士の御調査に拠る(本歌取りと新古今和歌集)

本歌取り一覽

べと咲くや木の花 一〇二三

万葉集

一五 九九・一二七六  
五一 四三〇・五〇五

一一三  
一八 一二七

六四 六六一  
七五 一〇一八  
八七 一二二七  
一四一三 六六二  
一五〇〇 七〇四  
二二七〇 九四九  
二五四二 八四三  
三五二二 二九七

一三七 一八五  
一三九 二一九  
一四一 一〇六〇  
一五二 一九七・一〇六三  
一五六 一〇七五  
一五九 一九三  
一六六 一一八〇  
一七七 二二二  
一八四 三一四・一〇九八  
一九四 三九一  
二〇四 一一四七  
二七三 二六一・三八六  
二七九 四四五  
二八三 三九六  
二九四 九一  
三四四 一四一八  
三四九 四二三  
三八六 八五四

古今集

浪速津に咲くや木の花冬ごもり今は春

一一三 六七  
一三六 一三五九

三八八 五八・五二三・六六九  
 四〇八 二三一  
 四一一 五三六・一二五九・一三三二  
 四一二 一三三四  
 四二一 四〇一  
 四二五 七六九  
 四三〇 二〇四  
 四三九 二九一  
 四五三 六五五  
 四七八 一九・五九四  
 四八四 六四三  
 四九〇 一一四七  
 五〇一 七七四  
 五〇四 七二三  
 五〇五 二四七  
 五〇六 六三四・七三二・七三三  
 五一六 九〇四  
 五二六 七四〇  
 五三二 四五五  
 五五八 一三二二  
 五九五 七六七  
 六〇五 一二三二  
 六一五 七八五・九九五

六一八 七八八  
 六二八 七二〇  
 六三二 七九一  
 六四四 四二二・一三二二  
 六四七 一九二・八九五  
 六五〇 一二九  
 六五九 一三三〇  
 六七〇 七二三  
 六七六 七一四  
 六九〇 八二八  
 六九一 三七三・八一二  
 六九二 二〇三  
 七〇〇 七六八  
 七〇六 七七二  
 七〇九 九一三  
 七二七 九七七  
 七三二 八七七  
 七四七 五三・一〇四七・一二九八  
 七五八 三三六・八八一・八八二・九  
 七八九 四八三  
 七九三 九九九  
 七九七 一〇二八

八〇七 九七二  
 八〇八 七七七  
 八二〇 九〇七  
 八二一 四三三  
 八三七 七二七  
 八三九 七九六  
 八四五 一三二八・一三五〇  
 八六七 二八四  
 八七一 一七四  
 八七四 一七八  
 八七八 三三一  
 八七九 二二七  
 八九五 一〇七三  
 九〇〇 一一〇三  
 九〇四 四五四  
 九〇九 一二三・一三九三  
 九一〇 一一八一  
 九三三 八七二・一〇七〇・一二五〇  
 九三五 二九一  
 九五〇 一二一六・一二七六  
 九五五 一四一・一〇六一  
 九五九 九一六  
 九六五 七〇七

九六七 一三四・九六七・一〇四三

九七二 九八八

九八一 一二一三

九八二 四〇四・五九七

九九四 五九八

一〇〇一 三〇四

一〇〇三 五六〇・一二〇〇

一〇〇四 五七八

一〇〇五 四一七

一〇〇九 八〇一

一〇二五 六四七・一二一九

一〇六一 四三四

一〇七一 八六九

一〇七二 四九六

一〇九〇 三二九・一一四八

一〇九二 五二四・五二五・五二六

一〇九三 一五九・八三七

一〇九四 四四九

一〇九九 七八一

一一一一 九四八・一一五三

後撰集

一九九 一三八六

二〇九 二二六

四四五 四〇九・四二〇

五一六 六四八

七〇六 三二七

七一九 三六五

七三三 七八九

八一〇 一〇九

九三九 八〇九

一〇七七 一〇五六

一〇八一 二八一

一〇八六 一二六七

一〇九〇 五七三・七九二

一〇九九 七六

一一七〇 二二二

一四二〇 五一〇

拾遺集

八六八 七三七

八八四 九三九

八八九 六三九

八九七 一三一四

一二九九 一三七二

後拾遺集

二一九 七一〇

六二六 九六二

一〇四二 七七八・七八〇

金葉集

四五三 三四四

詞花集

二六九 九五六

千載集

七三三 七八六

一一一四 八四八  
二二五一 六一二

新古今集

一〇四 一〇二九  
四九九 四四一  
四九八 八八六  
六五四 六六三  
七一三 八四  
七五七 一二九四  
八四八 一二二二  
八五〇 一三三〇・一三五九  
九〇三 六五六  
九九〇 七六・三二七  
九九七 七三四  
一三六八 二一六  
一四〇八 九八六  
一四三二 八〇七・九七四  
一五八九 六〇  
一六一四 二二六  
一六四八 一〇九七  
一六八七 一二〇四

一七一六 三二六  
一八五五 七七六

新勅撰集

四五六 一二九三・一二九五  
四九九 二一  
六三七 九七五  
七二九 六六七  
七三六 九一七  
九四四 八八九

伊勢物語

八〇 八八八

大和物語

四八一 一一一四

源氏物語

七六五 一三八二

八二一 八七五  
八九三 九一四  
九九一 九二五  
一〇二八 九一七・九五二・九八五・九  
八七

八七

一〇七八 四六一  
一三八三 九二三

狭衣物語

一六四五 二五八

夫木抄

みちのくのとふのすがごも七ふには君  
を寝させて吾三ふに寝む 八三八

(本学教授)